

国際共修授業における古典読解 —「多言語で読む源氏物語」実践報告—

佐藤勢紀子

発表者の関心領域は、古典教育および国際教育である。古典読解を国際共修の形で行うことの学習効果を明らかにしたいと考え、東北大学において、国際教育科目「国際教養特定課題」と留学生対象科目「中上級国際共修」のオンライン合同授業を開講した。授業題目を「多言語で読む源氏物語」とし、「世界の文学」と称される『源氏物語』の若紫巻をとりあげ、複数の外国語訳を用いて、発表とグループワークを中心とした授業を行った。受講者は日本人学生 49 名と留学生 11 名である。

テキストとして、玉上琢彌訳注『源氏物語』（角川書店）の現代語訳のほか、2 つの英語訳、2 つの中国語訳を使用し、必要に応じて物語の原文を参照した。若紫巻を 12 の部分に分け、3 日目以降の部分を担当する 10 班の発表グループを作った。発表グループは、1) 担当部分の概要を絵を用いて説明し、2) メンバーごとに 4 つの外国語訳のうち 1 つを選んで分担部分を日本語に訳した上で玉上訳との比較考察を行い、3) クラスで話し合いたいことを 3 点提示した。各回の授業は、概ね、前回の振り返り（15 分）→振り返りにもとづくグループワーク（15 分）→発表および質疑応答（45 分）→提示された 3 点の問題についてのグループワーク（15 分）という流れで行われた。

発表と質疑応答、グループ討論を通じて、訳の相違には、主語を明示するか否か、敬語動詞の有無など言語の性質による違いのみならず、人々が何を関心事とし、どのような価値観を有しているかといった文化による違いが反映されていることが繰り返し認識された。また、同じ言語の訳でも翻訳の方針により様々な違いが生じていることが確認された。国際共修という学びの場で、日本人学生は、言語や文化を異にする留学生との情報交換・意見交換によって、また、留学生は、日本人学生との共同作業で日本の古典を読み解くことによって、自他の言語・文化についての学びを深めることができていると考えられる。